ボヘミアの「呑み込む」海と熊
－『冬物語』におけるアーケイディア－

丹羽佐紀*

（2015年10月27日　受理）

An Analysis of the Swallowing Sea and Swallowing Bear in Bohemia:
The Meaning of Arcadia in *The Winter's Tale*

NIWA Saki

要約

『冬物語』において、ボヘミアの海と熊は、共に呑みこむ存在として描かれる。しかもボヘミアの海は実際には存在しない。エリザベス王女とプファルツ選定侯との婚儀が噂された時期であることを考えれば、呑みこむ海は、プロテスタント国としてのイングランドが、他者を制しつつアーケイディアにたどり着くための媒介として機能すると解釈できる。このような政治的背景を念頭におきつつ、本論では特に熊との共通性に注目したい。この海が観客の意識の中で「存在しない」海から「存在する」海へと変貌を遂げる過程で、熊の登場がどのようにそのプロセスを表象する鍵となっているかを探る。

キーワード：海、熊、アーケイディア、プロテスタント、表象

はじめに　－ジェイムズ１世をめぐる時代背景－

『冬物語』は、McMullan も指摘するように、シェイクスピア晩年の歴史劇『ヘンリー8世』の上演時期と重なり、作品の背景に共通するテーマも多い。(119)[1]『ヘンリー8世』については、その副題 *All is True* における「真実」が示唆する内容をめぐって、当時のいわゆる“Christian Truth”（McMullan, 68）と称される宗教的観点から、プロテスタントの勝利を期待する時代の趨勢を象徴する劇という位置づけがしばしばなされる。『冬物語』についても同様で、シチリ

*　鹿児島大学教育学系　准教授

アとボヘミアの和解、また将来の王位継承を促す物語の結末は、イングランドの対外政策への人々の期待を反映させていると一般的には解釈される。

この二つの劇をめぐる背景については、ジェイムズ1世の娘エリザベス（“a Protestant Princess Elizabeth”）とプファルツ選帝侯フレデリック（後にボヘミア王）との婚礼を祝して、または少なくともそれを意識して書かれたとするのが批評家の見解の一致するところである。(McMullan, 65)[2] 1613年2月14日に執り行われたこの婚儀は、イングランドにとって、大陸におけるプロテスタント国との同盟を強化するという政治的意味合いを持っていた。それはイングランド国内の政治的・宗教的状況を安定させ、ジェイムズ1世治下におけるプロテスタント国としての基盤を確かなものにするためにも必要な政策であった。だが、当時カルヴァン派の信奉者が特に多かったボヘミアの王に選ばれたフレデリックは、後に1620年白山の戦い（Battle of White Mountain）で神聖ローマ皇帝フェルディナント2世に敗れて亡命を余儀なくされ、妃のエリザベスとともに「冬の王」「冬の女王」とそれぞれ呼ばれることになる。その事実は『冬物語』上演当時の観客には知る由もないが、この作品におけるフロリゼルとパーディタの結婚及びボヘミア王位継承のあらすじが、フレデリックとエリザベス王女の結婚と王位継承を称えているという歴史的背景を踏まえるならば、彼らはまさに『冬物語』の主人公としてふさわしいと言える。

しかしながら、シェイクスピアの『冬物語』については、特にボヘミアを中心とする場面で、羊飼いや道化による malapropism の喜劇的対話が繰り広げられ、また羊の毛刈り祭でサターの踊りの場面が出てくるなど、その田園牧歌的展開から、『ヘンリー8世』とは異なりロマンス劇と捉えられることが多い。確かに、「ボヘミアの海」に端的に象徴される非現実的な世界の描写は、伝統的なアーケイディアのイメージに依拠したものであり、シチリアの洗練された宮廷場面との対照性を観客に印象づける。だが、3幕3場で道化によって語られる、ボヘミアの海岸でのカニバリスティックな光景の描写は、純粋にアーケイディアの一光景として捉えるには些か不自然である。この場面では、舞台上に実際に登場する熊にアンティゴナスが追いかけられ、その具体的顛末を道化がわざわざ羊飼いに報告する。[3] 嵐で船を難破させ水夫たちを溺れさせた海と、「呑みこむ」というその同質性において熊を並列させる彼の台詞は、当時の観客にどのような劇的作用をもたらしたのだろうか。

１．浄化の海　－嫉妬という「邪教徒」－

2幕3場で、シチリア王リオンティーズは、幼馴染みのボヘミア王ポリクシニーズに滞在を引き延ばすよう頼むが、聞き入れてもらえない。そこで彼は、妻のハーマイオニーに友人を説得してくれるよう自ら持ちかける。ところが妻の説得が功を奏したと見るや、リオンティーズは嫉妬の念に取り憑かれ、二人の不義への疑いを募らせる。この疑念のプロセスは、政治的コンテクストにおいて捉えるならば、二国間の関係を不安定な状態にする根本要因として作用し、以後の劇のあらすじ展開において、海の不安定さと連動して観客の意識の底に留まるこ

とになる。リオンティーズはポリクシニーズのことを、「やつ自身、あまりにも強大であるのみか、さらに強力な味方がある、同盟国がある」（“in himself too mighty, / And in his parties, his alliance”（2.3.19-20））と洩らす。彼の台詞は、ポリクシニーズの立場からすれば、リオンティーズの誤解と嫉妬から、ボヘミアとシチリアが一触即発の事態となりかねない不穏な状況に陥ることを意味する。ボヘミアは、シチリアに攻め入られるかもしれない。

この根拠のない嫉妬を、ポーリーナは「その火（嫉妬）を燃やすものこそ邪教徒です、火に焼かれる女がではありません」（“It is an heretic that makes the fire, / Not she which burns in't”（2.3.113-114））と、「邪教徒」の比喩を用いて非難している。ここでリオンティーズの嫉妬心は、プロテスタントであるボヘミアの王国を脅かす存在としてのシチリアを象徴している。一国の王の言動所作は、その国全体の趨勢を左右するものである。この作品が上演された当時、実際のシチリアは、ナポリと並んでカトリック国スペインの支配下にあった。1479年にスペイン王国が成立して以来、シチリアはスペイン王国の一部となる。スペインは、フェリペ2世（1556－1598）治世下の1588年に、イングランドの海軍によって無敵艦隊に壊滅的ダメージを負わされたとはいえ、依然として海上における勢力を保っていた。イングランドは、ジェイムズ1世の時代にスペインとの関係改善を図るが、それを機に国内の宗教を取り巻く状況が落ち着いたというわけではない。ジェイムズ1世治世下のイングランドにおいて、観客はもちろんシェイクスピア自身がシチリアという国にどの程度の知識を持っていたかは定かではない。しかし、少なくとも1605年の Gunpowder Plot に端的に象徴されるように、国内でもいつどのような形でカトリック側の反乱が生じないとも限らない社会的状況は、リオンティーズに突如湧き起こった嫉妬心が、ボヘミアの政情を脅かす危険因子となって増大しかねない経緯と重ねて捉えることができる。

また2幕3場において、ハーマイオニーに対する仕打ちをポーリーナに責められたリオンティーズが、ポーリーナを魔女呼ばわりし、子供と母親を火炙りにしてやると4回、さらにポーリーナをも1回脅す場面は、当時の魔女裁判や異端審問を想起させる。

Leontes: A mankind *witch*! Hence with her, out o' door;
A most intelligencing bawd.
. . .
Hence with it [this brat], and together with the dam
Commit them to the fire.
. . .
I'll ha' thee burnt.
. . .
My child? Away with't! Even thou, that hast
A heart so tender o'er it, take it hence,

And see it instantly consumed with fire.

. . .

The bastard brains with these my proper hands

Shall I dash out. Go, *take it to the fire*. . . .　　（2.3.65-139）（Italics mine）

嫉妬という怪物に取り憑かれてリオンティーズが取ろうとする処罰の行為は、無実の者に根拠のない罪を着せて処刑しようとする眉唾ものの魔女裁判に例えられる。ジェイムズ1世が魔術に関心を持ち、自らも『悪魔学』（*Demonologie*, 1597）を著しながら、後に魔女裁判の信憑性に懐疑的になったことを考慮すれば、嫉妬に狂ったリオンティーズの主張がいかに突拍子もない根拠に基づいたものであるか、その比喩的描写においてこの場面は注目に値する。

２．イングランドの海へ　ーアーケイディアにおける熊の存在ー

さて、このような歴史的観点を礎として3幕3場の海と熊の場面を捉えてみると、どのような事が浮き彫りにされるだろうか。3幕3場で、アンティゴナスがハーマイオニーの不義を確信するに至ったビジョンを語る場面は、ただの夢の戯言と取れば劇中の幻想的な雰囲気を助長する「語り」の効果を持つと言える。しかしアーデン版の編者 Pitcher も述べるように、本来プロテスタントの視点に立てば、彼の戯言は「悪魔によって生み出された妄想」（“delusions produced by the Devil”）で、惑わされてはならないものである。（236）そうであれば、彼がその妄想を真実と受け取り、ハーマイオニーが不義を働いたと思い込むことは背徳のわざであり、彼が報いを受けたとしても当然のことと言える。したがって、もしアンティゴナスが水夫たちと共に海に呑みこまれれば、海は彼の不信を浄化させる意味合いを持つと解釈することも可能であったろう。実際、道化は海が罪なきパーディタを追放の地へ追いやった船を呑みこみ、その船の舵を取った船乗りたちも同じように呑みこんだことを父親の羊飼いに語る。

だがこの場面で、アンティゴナスを呑みこむのは熊であって海ではない。アンティゴナスの夢語りから熊との遭遇、そして道化によるカニバリスティックな語りへの移行は、観客を牧歌的な世界から一気にロンドンの現実社会に引き戻す。

Clown: I would you did but see how it chafes, how it
rages, how it takes up the shore; but that's not to
the point. O, the most piteous cry of the poor souls!
Sometimes to see 'em, and not to see 'em; now the
ship boring the moon with her mainmast, and anon
swallowed with yeast and froth, as you'd thrust a cork
into a hogshead. And then for the land-service, to see
how the bear *tore out his shoulder-bone*, how he cried

to me for help, and said his name was Antigonus, a
nobleman!　（3.3. 86-95）

Clown:　The men are not yet cold under water, nor the
Bear half dined on the gentleman – he's at it now.　（3.3.102-103）（Italics mine）

当時の観客にとってロンドンの劇場界隈で馴染みであった熊いじめの熊は、劇中においてアンティゴナスの妄想を海のごとく「呑みこんだ」（“swallowed”）のである。[4] ここで熊と並んで観客に認識される海は、イングランドの海であって、ボヘミアの牧歌的な世界に広がるお伽話の海ではない。熊の登場は、「呑みこむ」存在としての海を舞台上に現出させ、観客がイングランドの海と結びつけるための媒介として機能しているのである。さらにその海は、前述したように、現実社会において「邪教徒」を呑みこむ海でなければならない。肉体の消滅は、羊飼いが海岸で赤ん坊を見つけるというその同時性によって、観客の意識の中で新たな誕生を可能にする海への期待に変えられていくのだ。カニバリスティックとも言える熊の描写にイニシエーションとしての論理的根拠を見出して初めて、観客の意識の中で、ボヘミアは自分たちが理想とするアーケイディアとなり、そこへたどり着く媒介として海を捉えることが出来るようになるのである。

Vaught は、この場面で熊が果たす役割について、まず2月2日の Candlemas に、冬眠から覚めて穴から出てきた熊が悪者を食べるという民間信仰における勧善懲悪との関連性を想起させると指摘している。すなわち、主人の命令とはいえパーディタを捨てるという行為に及んだアンティゴナスを、悪者と見做し退治するという役割である。また Vaught は、特に劇という空間における熊の「貪り食う胃袋」の機能について、中世の道徳劇以来、舞台上で怪物の口によってシンボリックに表された、地獄の口との関連についても指摘している。

> In Act III the bear that devours good-hearted Antigonus shortly after he abandons the infant Perdita in Bohemia at Leontes' command recalls folkloric accounts of a bear emerging from its cave to eat evil men . . . during Candlemas on February 2. The devouring maw of Shakespeare's tragicomic bear functions as a version of a medieval hell mouth, an oral, carnivalesque stage property that occurs symbolically in both Marlowe's *Doctor Faustus* and *The Jew of Malta*.（105）

前者のような民間信仰の観点から考えれば、熊は善悪の審判を下し、悪を抹消する存在と捉えられる。また後者のような宗教的観点に立ち、「貪り食う」行為に及ぶ熊が何を表象するのかを考えれば、地獄の口という、従来カトリック的な発想に基づく善悪の審判の劇的形態は、『冬物語』において、皮肉にも逆にプロテスタント側から見た悪、すなわちリオンティーズの嫉妬に重ね合わされた邪教を呑みこむ存在として、アーケイディアへ導く「ボヘミアの海」と結びつけて捉え得るのである。

３．豹変する海　－追われた熊の変貌－

シチリアとボヘミアを媒介する海―それは無限の流動性を持って両者の関係に影響を与える。海は一方で、1幕1場でカミローが「大海をへだてて握手をされ」（“[they] shook hands / as over a vast”（1.1.29-30））と描写するように、かつてリオンティーズとポリクシニーズが育んだ男同士の友情の連続性の表象でもある。どれほど彼方の地であろうと、海は空と同じように同次元において自由に二つの国をつなぐ。文化的表象として肯定的に捉えるならば、二国間の友情をつなぐ海は、未だ見ぬはるか異国の地へ人々を誘い寄せる招きの海である。

しかしこの海は裏を返せば、お互いのテリトリーへ隙間を衝いて侵入する性質も孕む。このような水の滲出性のイメージは、1幕2場において、リオンティーズが水門の例えを用いてハーマイオニーとポリクシニーズの不義を疑う台詞にも見受けられる。リオンティーズは、ハーマイオニーの水門がいとも簡単に開かれ、ポリクシニーズがそこを攻め入るのを容易にしたと苦々しく言う。

> Leontes: Now, while I speak this, holds his wife by th'arm,
> That little thinks she has been sluiced in's absence,
> And his pond fished by his next neighbour, by
> Sir Smile, his neighbour. Nay, there's comfort in't,
> Whiles other men have gates, and those gates opened,
> As mine, against their will.　（1.2.192-197）

彼の台詞は、一義的にはセクシュアルな意味を持つが、同時に戦闘による敵陣の水門への侵略をも示唆している。水に例えられる敵は、見えない所にもいつの間にか不気味に侵入し、気がついた時には既に要所を陣取ってしまっている。Dubrow は、この場面の水門突破による侵略の比喩的描写を、初期近代イングランドにおける女性の身体への性的侵略と、土地や所有財産の略奪というイメージとの相関性の視点に立って分析している。

> Similarly, acknowledging the instability of land ownership complicates the commonplace associations between real estate and women. In early modern England such property had the instability associated with the female body, thus helping to explicate why and how both land and the edifices on it were often though not invariably gendered female . . . . Those connections have implications as well for recent studies of proto-colonialist tracts: if, as many critics have suggested, the gendering of newly discovered land female asserts the sexual and political power of the would-be conqueror, this habit also carries the reminder that golden lands were as liable to successive waves of invasion and conquest as golden ladies.（88-89）

特に家父長制社会にあっては、所有の概念はしばしばそれを奪われることへの不安と表裏一体となって描出される。テリトリーを略奪されることは、男性社会における masculinity 存続の危機をも意味する。リオンティーズの台詞は、妻を寝取られることだけでなく、自らの男性性そのものが脅かされることに対する屈辱感と怒りの表れなのである。だとすれば、逆の立場に立てば、カミローたちのボヘミアの海岸への上陸は、ポリクシニーズにとって自国への侵略という危機的状況とも受けとめられる。ボヘミアという水門は守られねばならない。

この時、羊飼いと道化が登場する一見牧歌的な光景としてのボヘミアの海は、水面下で急襲の機会を狙う侵略者を潜ませる危険な存在としての性質を持つ。また同時に水夫たちを呑みこむその海は、テリトリーを襲われそうになったボヘミアの逆襲をも表象する。食うか食われるかの争いをグロテスクに体現する海は、観客に当時のイングランドを取り巻く国内外の状況を思い出させる存在となる。そして、外的世界から他者を近づけると同時に、それを「呑みこみ」、攻守の砦として機能する海は、ここでも熊と並列的に描かれることによって、奇妙に現実的である。

3幕3場で、ボヘミアの海岸に上陸した水夫のひとりが、「ここは、猛獣が住んでいるってことで有名なところなんです。」（“Besides, this place is famous for the creatures / Of prey that keep upon't.”（3.3.11-12））とアンティゴナスに警告する。ここで言及される猛獣とは、柔和な生き物を襲って貪り食う危険な存在のことである。実際、このあと舞台に登場する熊は、アンティゴナスに襲いかかるべく追いかける。しかしこの熊は同時に、羊飼いやアンティゴナスが「狩りで追われた熊だ」（“This is the chase”（3.3.56））と言うように、若者たちに狩りで追いつめられて舞台上に逃げ込んできた、弱者としての存在でもある。また道化が「熊ってやつは、腹をすかしてなきゃあ、ひどいことしないもんだがなあ。」（“They are never curst but when / they are hungry”（3.3.127-128））と言うように、熊はふだんは柔和な生き物でもある。ここで観客が想像するのは、現に当時のロンドンで見慣れていた熊いじめの光景であろう。だが追いつめられた熊は、アンティゴナスに襲いかかり、彼を「呑みこむ」のだ。この熊が表象しているのは、侵略・略奪をする側とされる側との同時性、そして牧歌的に見える世界に潜む現実の危険である。ここでも、海と熊は同義的に描かれている。それを端的に表しているのが、アンティゴナスの「なんだ、あの叫び声は！」（“A savage clamour!”（3.3.55））という台詞である。この“clamour”が、具体的に何の音を指すのかについては、様々な解釈がなされてきた。Snyder や T. Curren-Aquino が解説しているように、熊を追う猟犬の吼え声、熊の唸り声ともとれるが、また同時に嵐で海が荒れ狂う音とも考えられる。（158）アンティゴナスの台詞は、海と熊が“savage clamour”を発し、ともにボヘミアというアーケイディアの二面性を表す存在として描かれていることを示唆するものである。海から陸へと上がったアンティゴナスは、その連続性の線上に乗せられ、両者のグロテスクな側面のいわばスケープ・ゴートとして「呑み込まれる」ことになる。

さらにこの海と熊は、4幕4場で道化が「権力っていうのは頑固な熊だ」と言うように、国政を「呑みこんで」内側から支配する可能性を孕んだ、権謀術数的な獣性をも意味する。

Clown: Close with him[Autolycus], give him gold; and, though
authority be a stubborn bear, yet he is oft led by the
nose with gold.　　（4.4.806-808）

海と熊は、「呑みこむ」ことで身体（国政）の核を抹消し、形骸化して中身がなくなった残骸の上に君臨するという、グロテスクな政治的陰謀を表象する存在でもある。アーケイディアは、常に揺らぐ不穏な海を媒介して到達しなければならない世界なのだ。実はこのような内なる不穏さは、ボヘミアの場面に登場するもう一人の人物によっても暗示される。陽気に歌を披露しながら他人の懐を狙う trickster としてのオートリカスは、その名前の由来“the wolf himself”が示すように、一方では人あたりの良い語り口でいろいろな登場人物たちに愛想を振りまくが、他方で巧みに人を騙して破滅へ導く危険を孕んだ、「噛みつく」存在でもある。（Pitcher, 142）Perlman が“As his name tells, he is unpredictable, may be dangerous, and willing to bite to save his own skin”と指摘するように、彼もまた、田園牧歌的なボヘミアの場面で、歌を歌いつつグロテスクな姿へと豹変するかもしれないのである。（230）

終わりに

以上のように「呑みこむ」海と「呑みこむ」熊の場面を経た後で、ボヘミアの地はフロリゼルとパーディタの恋の舞台となる。先にも述べたように、『冬物語』は祝婚を背景として上演され、またボヘミアは、王女エリザベスとプファルツ選帝侯フレデリックがやがて統治することになる国でもあることを考えれば、アーケイディアは、海を越えてイングランドが向かってゆく未来の社会という幻想を観客に抱かせる象徴でもある。

だが存在しないはずのボヘミアの海は、舞台に突如として登場する眼前の熊との共通性によって、アーケイディアに潜む別の側面を観客に否応なく見させ続ける。そこには、極めて政治的な要素が絡んでいる。アーケイディアは、平和的な旅の果てに到達する世界ではない。その間に介在する海がいかなる性質を孕むのかを認識する時、ボヘミアの海は観客の意識の中で、存在するイングランドの海へと確実に変えられていく。そしてそのプロセスは、この作品においてボヘミアに熊が登場するからこそ明らかにされるのである。

＊本稿は、第54回シェイクスピア学会（2015年10月11日　於　北海道教育大学函館校）セミナー1（「シェイクスピアと海　－比喩、背景、歴史」）において、「『冬物語』におけるボヘミアの海と熊　－「呑み込む」存在を媒介とするアーケイディア－」と題して口頭発表をした原稿に、題名を変更の上、加筆修正を施したものである。本発表に際しては、関西学院大学の Daniel Gallimore 氏、東京経済大学の本橋哲也氏、立教大学大学院の牧野美季氏にいろいろとご助言を賜った。記して感謝申し上げる。

注）

テキストの引用は、アーデン版（William Shakespeare, *The Winter's Tale*, ed. John Pitcher（London: Bloomsbury, 2010））を用いた。また日本語訳は、小田島雄志訳『冬物語』（白水社、1983年）を使用した。

1. 『ヘンリー8世』については、ジョン・フレッチャー（John Fletcher, 1579-1625）との合作説もあるが、本論では触れない。ちなみに、アーデン版の編者 McMullan は合作説に従い、タイトルページの作家名を“William Shakespeare and John Fletcher”と記している。
2. これに先立って、1612年11月にはジェイムズ1世の長子ヘンリーが急死しており、王女エリザベスの結婚にはそれだけ一層、政治的な期待が込められていたと言える。
3. 舞台上における熊の演出が、上演当時実際にどのように行なわれていたかをめぐる議論について、ケンブリッジ版の編者 Snyder と Curren-Aquino は、その変遷を紹介している。（30-33）1935年の Lawrence に始まり役者が演じていたであろう可能性を指摘する説、またその後の Gaines らによる、本物の熊を使用したとする説への言及もあるが、いずれの説にもまだ議論の余地があるとしている。
4. シェイクスピアの劇作品のうち、動物が舞台に登場するものとしては『夏の夜の夢』のボトムのロバ、同じ作品の劇中劇におけるライオン、また『ヴェローナの二紳士』2幕3場に出てくる犬が挙げられる。ただしロバとライオンについては、この場合完全な意味での動物とは言えないのはもちろんである。

参考文献

Armitage, David, Conal Condren and Andrew Fitzmaurice, eds. *Shakespeare and Early Modern Political Thought*. Cambridge: CUP, 2009.

Berry, Edward. *Shakespeare's Comic Rites*. Cambridge: CUP, 2010.

Bristol, Michael D. *Carnival and Theater: Plebeian Culture and the Structure of Authority in Renaissance England*. New York and London: Methuen, 1985.

Bullough, Geoffrey, ed. *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*. London: Routledge & Kegan Paul, 1975.

Collinson, Patrick. *The Birthpangs of Protestant England: Religious and Cultural Change in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*. London: Macmillan Press, 1988.

Cressy, David. *Travesties and Transgressions in Tudor and Stuart England*. Oxford: OUP, 2000.

Curran, Kevin. *Marriage, Performance, and Politics at the Jacobean Court*. Farnham: Ashgate, 2009.

Dubrow, Heather. *Shakespeare and Domestic Loss: Forms of Deprivation Mourning and Recuperation*. Cambridge: CUP, 1999.

Hyland, Peter. *Disguise on the Early Modern English Stage*. Farnham: Ashgate, 2011.

Jones, Mike Rodman. *Radical Pastoral, 1381-1594: Appropriation and the Writing of Religious Controversy*. Farnham: Ashgate, 2011.

Ko, Yujin, and Michael W. Shurgot. *Shakespeare's Sense of Character: On the Page and From the Stage*. Farnham: Ashgate, 2012.

Marrapodi, Michele, ed. *Shakespeare and Renaissance Literary Theories: Anglo-Italian Transactions*. Farnham: Ashgate, 2011.

McMullan, Gordon. Introduction. *King Henry VIII*. By William Shakespeare. London: Thomson Learning, 2000.

Orgel, Stephen. *Impersonations: The Performance of Gender in Shakespeare's England*. Cambridge: CUP, 1996.

Perlman, Mace. “Reading Shakespeare, Reading the Masks of the Italian Commedia: Fixed Forms and the Breath of Life.” *Transnational Exchange in Early Modern Theater*. Eds. Robert Henke and Eric Nicholson. Farnham: Ashgate, 2008.

Quarmby, Kevin A. *The Disguised Ruler in Shakespeare and His Contemporaries*. Farnham: Ashgate, 2012.

Salkeld, Duncan. *Shakespeare Among the Courtesans: Prostitution, Literature, and Drama, 1500-1650*. Farnham: Ashgate, 2012.

Shakespeare, William. *The Winter's Tale*. Ed. John Pitcher. London: Bloomsbury, 2010.

----------.*The Winter's Tale*. Eds. Susan Snyder and Deborah T. Curren-Aquino. Cambridge: CUP, 2007.

Theile, Verena, and Andrew D. McCarthy, eds. *Staging the Superstitions of Early Modern Europe.* Farnham: Ashgate, 2013.

Vaught, Jennifer C. *Carnival and Literature in Early Modern England.* Farnham: Ashgate, 2012.